

OKAYAMA POLYPHONIE ENSEMBLE

岡山ポリフォニーアンサンブル 第21回演奏会
岡山市 西川アイプラザホール

2005年10月23日

14:30開場 15:00開演

第3回おかやま県民文化協賛事業

第43回岡山市芸術祭参加

プログラム

第一部

ミサ曲

聖なるかなこの日

G. P. da パレストリーナ

第二部

ルネサンス器楽曲集

聖なるかなこの日

G. P. da パレストリーナ

2つのファンタジア

O. ギボンス

「パヴァーン・ガリアルド・アルメイン

及び短いエアー集(1599年)」より

A. ホルボーン

～ パヴァーンとガリアルド

光の消ゆる前に

W. バード

天使は優雅なる言葉にて

W. バード

戦い

C. ジャヌカン

◇ ◇ ◇

休憩

◇ ◇ ◇

第三部

カンタータ 第45番

《人よ、汝によきこと告げられたり》

J. S. バッハ

合唱

レチタティーヴォ

<テノール : 有馬 雄二郎>

アリア

<テノール : 有馬 雄二郎>

アリオーン

<バス : 坂本 尚史>

アリア

<アルト : 脇本 恵子>

レチタティーヴォ

<アルト : 脇本 恵子>

コラール

プログラム・ノート

G. P. da パレストリーナ Missa Dies Sanctificatus <ミサ・聖なるかなこの日>

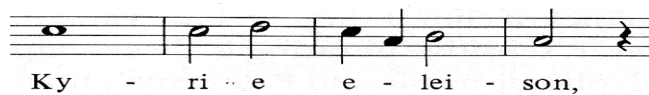
パレストリーナは、皆様よくご存じの通り14世紀後半にイタリアで活躍した作曲家である。穏やかで柔らかく、流れるような旋律で知られ、我が国でももっともよく知られているルネサンスを代表する作曲家の一人である。数多くのミサ曲、モテットなどの教会作品を残したばかりでなく、世俗曲や器楽曲も作曲している。

ルネサンス時代のミサ曲には、自由なテーマに基づくもの、グレゴリオ聖歌を定旋律に用いたもの(定旋律・ミサなど)、グレゴリオ聖歌に基づくもの(パラフレーズ・ミサ)、モテットや世俗曲に基づくもの(パロディ・ミサ)などがある。

パレストリーナもこれらのすべてのミサ曲を作曲している。本日演奏する曲は、1594年にローマで出版されたミサ曲集第6巻に含まれる、パレストリーナによる同名のモテットによるパロディ・ミサである。ミサ曲の原曲であるモテット Dies Sanctificatus<聖なるかなこの日>はクリスマスを祝うモテットで、歌詞はクリスマス日中のミサのアレルヤ誦からとられ、厳かな内にも喜びのあふれる曲である(本日第2部でリコーダーアンサンブルにより演奏する)。このモテットは、1563年に出版された彼の個人曲集としては3番目のものである「年間の祝日用のモテット集」に納められている。

パレストリーナのパロディ・ミサでは、ミサ曲の冒頭部分と終わりの部分に原曲の冒頭とおわりの部分の旋律を用いるのが通例となっている。この曲も、それにならって、原曲の冒頭の旋律と、後半の3拍子部分がとられている。

キリエの冒頭部



モテットの冒頭部



グローリアの終曲部



モテットの3拍子部分



<坂本尚史>

ジョヴァンニ・ピエルルイーダ・パレストリーナ

(Giovanni Pierluigi da Palestrina, 1525 年?-1594 年 2 月 2 日)

イタリア・ルネサンス後期の音楽家である。カトリックの宗教曲を多く残し「教会音楽の父」ともいわれる。

ローマ近郊のパレストリーナに生まれる。ローマのサンタ・マリア・マジョーレ大聖堂の聖歌隊員となる。1544 年、パレストリーナの教会でオルガン奏者になる。教皇ユリウス 3 世に求められ、1551 年、教皇庁のジュリア礼拝堂の楽長、1555 年にシスティーナ礼拝堂の聖歌隊歌手に任命された。イタリア・ルネサンスの時期、音楽はフランドルが中心であり、ローマ教皇庁の音楽隊にもフランドルの音楽家を招くという状態であったが、パレストリーナはイタリア人音楽家として大きな名声を得た。

少なくとも 100 以上のミサ曲、250 以上のモテットを初めとする数多くの教会音楽を作曲し、「教皇マルチェルス」のミサが代表作である。対抗改革(反宗教改革)の時期であり、厳格な教皇パウルス 4 世によって解雇された。その後、サン・ジョバンニ・イン・ラテラノ大聖堂の楽長などを経て、1571 年再びジュリア礼拝堂の楽長になる。妻子を伝染病で亡くし、失意に陥るが、裕福な毛皮商の未亡人と再婚し、恵まれた晩年であったという。

作品に見られる、順次進行を主体とした簡素・平穏・緻密な合唱様式はパレストリーナ様式と称されている。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

イギリス・ルネサンス音楽の黄金期 ～ ヘンリー8世からジェームス1世まで ～

イギリス・ルネサンス音楽の黄金期への幕を開けたのは、「率直王」というあだ名で呼ばれるヘンリー8世である。彼はチューダー王朝開祖のヘンリー7世の子として生まれ、音楽を好み、10歳でフルート、ビオラ、ハーブを演奏できたといわれている。また、宮廷にリコーダー・コンソート(合奏)を導入し、その後のイギリスにおけるリコーダー音楽発展の基礎を築いたことでも知られている。しかしながら、イギリス・ルネサンス音楽が花開いたチューダー王朝時代は、イギリスが二つの宗教の間を激しく揺れ動いた宗教改革の時代でもあった。

そもそもの発端は、カトリック教徒であるヘンリー8世の離婚問題であった。男子に恵まれなかった王は、スペイン出身の王妃キャサリン・オブ・アラゴン(カトリック教徒)と離婚し、彼女の侍女であるアン・ブーリンと結婚することを望んでいた。しかしながらローマ教皇がこの離婚を認めなかったため、ヘンリー8世は「首長令」を出してカトリックから離脱し、自らを教皇とする「英国国教会」を設立し、離婚を成立させたのである。これ以降のイギリスでは、王の交代のたびに宗教政策が変わるという混乱の時代が続いた。すなわち王妃キャサリンの娘であるメアリー1世の時代には、母の影響もあってカ国教が「カトリック」に戻り、その妹であるエリザベス1世(アン・ブーリンの娘)は、英国国教会を正式なイギリスの国教としながらも、穏健策を採ってカトリックに対しても寛大に臨んだ。しかし皮肉にも、こうした宗教における混乱が、イギリスにおいて多様な教会音楽を生み出すきっかけともなったのである。新しい教会での典礼はそれまでのラテン語に替わって英語で行われるようになったため、それに合わせて英語の礼拝音楽が必要となり、イギリス独自の教会音楽が誕生することになった。また、カトリックを復活させたメアリー1世や、国教会を推進しつつもカトリックとの融和を図ったエリザベス1世の時代には、従来のカトリックの音楽も作曲され、ラテン語と英語、両方の教会音楽が混在する時期もあった。

一方、世俗曲の分野でも、エリザベス1世の時代において目覚ましい発展がみられた。その代表といえるのが「マドリガル」である。マドリガルとはルネサンス期のイタリアで全盛を極めたポリフォニー様式の世俗音楽「マドリガーレ」がイギリスに伝わり、独自の形に変化したものである。イギリス・マドリガルは軽快な旋律とリズムを用いるのが特徴で、悲恋の詩を扱う場合でも明るく、むしろそのことを意識させない作風が多い。また舞曲では、荘重なパヴァーヌや軽快なガリアルドなど多種多様な舞曲が数多く作曲され、エリザベス女王自身も毎日のように踊っていたと伝えられている。

このようにエリザベス1世からジェームス1世の時代まで隆盛を誇ったイギリス・ルネサンス音楽だが、次のチャールズ1世の時代には清教徒革命により王制は一時廃止され、王室劇場などは破壊されてしまった。こうして、イギリス・ルネサンス音楽の黄金期は幕を閉じることになるのである。

今回の演奏会では、イギリス・ルネサンスの絶頂期に活躍した作曲家であるウィリアム・バード、オルランド・ギボンス、そしてアントニー・ホルボーンの世界に加え、フランス・ルネサンス期に活躍したクレマン・ジャンヌカンなどの作品を取り上げる。

< 葛谷光隆 >



「ヘンリー8世の肖像」

J.S.バッハ カンタータ第 45 番 「人よ、汝によきこと告げられたり」

1723 年5月にライブツヒにトマス教会カントルとして赴任したバッハは、毎週の日曜日に加えて様々な祝日に演奏される教会カンタータの作曲を開始した。その数は年間約 60 曲に及んだ。死後に出版された「追悼記」によれば、バッハは5年分、すなわち約 300 曲の教会カンタータを残したとされているが、現存するものは 200 曲に満たないものである。赴任後の 1723-1724 の2年間、バッハは精力的にカンタータの作曲を行い、ほぼ毎週のように新曲、もしくはライブツヒ赴任以前に作曲した作品の改作を演奏してきたが、3年目にはいと現存するカンタータの数はかなり少なくなっている。特に、1726 年2月からは自作の上演をやめ、マイニンゲンの親戚ヨハン・ルードヴィヒ・バッハの作品を次々に上演している。この年の後半には自作の新作の上演が復活するが、そのカンタータには冒頭に旧約聖書による合唱、中心に新約聖書、そして最後にコラルを配し、その間をアリアとレチタティーヴォでつなぐという構成で、ヨハン・ルードヴィヒ・バッハの作風の影響を強く受けたものとなっている。これは、同じ歌詞本である「ルードルシュタット詩華撰」によっているからである。カンタータ第 45 番もこの時期に属するものの一つであり、1726 年8月 11 日、三位一体後第8日曜日にライブツヒで初演された。

この日に読まれる書簡章句は「ローマ人への手紙 8:12-17」(神の御霊に導かれている者は神の子である)であり、福音書章句は「マタイによる福音書 7:15-23」(にせ預言者を警戒せよ)である。

「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまといあなたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である。あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるだろうか。すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。」

「私に向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。かの日には、大勢の者がわたしに、『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ。』」

テキストが注目するのは福音書章句における後半のはじめのくだりである。曲は2部に分割されており、第1曲は旧約聖書のミカ書にある御旨の宣告による預言の確認を語る壮大な合唱歌曲、第2曲は神が預言を下された経緯を語るテノールのレチタティーヴォ、第3曲は御旨の正しさを告白する舞曲風のアリアである。第2部は最後の審判の場面における力ある裁き

を預言するイエスの言葉である第4曲で始まり、続く第5曲はそのとき救われる『心の奥底からの信仰ある者』の喜びを語るアルトのアリアである。口と心こそが真の裁き手であると述べるアルトのレチタティーヴォを挟んで、終曲は義務の履行を誓うコラール(ヘールマン作コラール « O Gott, du frommer Gott) 第2節)である。

<坂本尚史>

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

(Johann Sebastian Bach, 1685年3月21日 - 1750年7月28日)

18世紀に活動したドイツの作曲家、さらには鍵盤楽器の名手として、西洋音楽史上において極めて重要な位置にある巨大な存在であり、もっとも偉大な一人である。バッハ家は音楽家の家系であり、バッハ姓の作曲家は非常に多い。

ヨハン・ゼバスティアンは、しばしば「J. S. バッハ」と略記され、また「大バッハ」とも呼ばれる。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

Member

- 指揮：** 坂本 尚史 (パレストリーナ)
林 真一 (バッハ)
- 合唱：**
- ソプラノ 板野陽子・岡田由理・岡野美絵・柴山陽子・武田美樹
船場淳子・平松加七子・藤井友佳
- アルト 板野浩子・行地知子・坂本新子・坂本真理子・霜山瑞穂
脇本恵子(賛助出演)
- テノール 有馬雄二郎・奥井伸二郎・波多野雄介・林 真一・村田知規
バス 奥田良明・小橋示知久・坂本卓也・坂本尚史・藤井隆志
- 合奏：**
- ルネサンス器楽曲**
- ブロックフレーテ 高畠稔雄・野原直子・吉野由美子
ブロックフレーテ & パーカッション 大山夏奈江, 奥井伸二郎, 吉村玲子
ブロックフレーテ & クルムホルン 葛谷光隆
- J.S.バッハ カンタータ**
- ヴァイオリン(1st) 榎本伸子・白石良子
ヴァイオリン(2nd) 角南洋子
ヴィオラ 宮本幸子
チェロ 宮本 正
コントラバス 青木洋江
フルート 葛谷光隆・熊瀬 好
オーボエ 都築常明・都築登史恵
ファゴット 奥野倫世
オルガン 山本みずゑ

表紙デザイン:近間 文

Okayama *Polyphonic Ensemble*

岡山ポリフォニーアンサンブル

問合せ先 : 090-2005-7254 (団長:有馬)

URL <http://park11.wakwak.com/~ope/>

MAIL ope_web@hotmail.com